

## 子宮頸がん予防ワクチン

平成 29 年 4 月放送

山崎 洋

子宮は胎児を育てる器官で、西洋梨のような形をした筋肉でできた袋です。お袋さんとは主に男性が使う母親の名称ですが、一説によれば「おふくろ」は子宮を意味する言葉であることに由来すると言われていています。その袋の入り口を子宮頸部、袋の本体を子宮体部と呼びますが、今日は、袋の入り口に発生する子宮頸がんとう子宮頸がん予防ワクチンについてお話します。

子宮頸がんの原因はヒトパピローマウイルス（略してHPV）と言われていています。子宮頸がんは、日本では年間約 10,000 人(2008 年)が罹り、約 3000 人が死亡していると報告されています。発症のピークは 40～50 歳代ですが、最近では 20～30 歳代の患者さんが増えています。

その、ヒトパピローマウイルス（HPV）は、100 種類以上あり、そのうち約 15 種類が子宮頸がんに関係したウイルスで、ハイリスク型 HPV と言われており、性行為によって感染します。しかし、ハイリスク HPV に感染すると必ずがんになるわけではなく、感染した女性の 90% は 2 年以内に自分の免疫力でウイルスを排除し、10% の人は、数年から数十年にわたって持続感染し、その中の一部の人が子宮頸がんになることがあると言われていています。子宮頸がんを予防する方法の一つは子宮頸がんワクチンを接種することでヒトパピローマウイルス（HPV）の感染を予防することです。もう一つは子宮頸がん検診を受けることにより、がんになる過程である、前がん状態や早期のがんを発見し、負担の少ない治療につなげることです。



子宮頸がん予防ワクチンは世界 130 ヶ国で承認され、日本でも平成 21 年からワクチン接種が行われています。そして平成 25 年 4 月からは、任意接種から国の法律に基づく定期接種の対象となりました。しかし、残念なことに、慢性疼痛や運動障害などの重い副反応がワクチンを接種した人から報告され、平成 25 年 6 月より、国は積極的なワクチン接種を中止しています。

その後、国内外においてワクチンの副反応について調査が行なわれてきましたが、現在まで、日本において問題となっているような慢性疼痛や運動障害などの多様な症状とワクチン接種の因果関係を証明する報告はなく、ワクチンの安全性に懸念を示すような科学的、疫学的根拠は示されていません。それゆえ、平成 29 年 1 月、日本産婦人科学会は「子宮頸部がんワクチン接種勧奨の早期再開を求める声明」を出し、国によるワクチンの積極的接種を再開することを求めています。また、WHO も若い女性が本来予防し得るヒトパピローマウイルスによる子宮頸がんのリスクにさらされたままになっている日本の状況を危惧し、安全で効果的なワクチンが使用されないことにつながる現状の政策は有害な結果になると警告を出しています。

しかし、実際問題として、ワクチン接種の対象である小学 6 年生から高校 1 年生の女子をもつ保護者としては、ワクチンの安全性は理解できても、普通の子に重大な副反応が出たとネットで書かれていたり、周囲がだれも接種していないという状況ではワクチン接種には積極的にはなれず、悩ましいところです。ワクチン接種についてその必要性、安全性は頭では理解できても、心では躊躇するところではないでしょうか。

私たち産婦人科医が望むことは、子宮頸がんの死亡者ゼロとなることです。そのためには、国が一刻も早く子宮頸がん予防ワクチン接種の勧奨の再開をしてくれることです。しかし、現在のところ、見通しはたっておらず、それまでは、女性のみなさんは、20 歳を過ぎたら、ぜひ定期的に子宮頸がん検診を受けていただきたいと思います。